

第19号

発行：Dream 五代塾
吹田市千里山西 5-14-17
発行責任者：理事長 川口 建

赤心 巖がん

Dream

五代塾

Godaijuku

Sinbun (新聞)

五代の生涯の偉業

「弘成館」鉦山業 (七)

Dream 五代塾顧問 八木孝昌

剣術家にして政治家籠手田安定

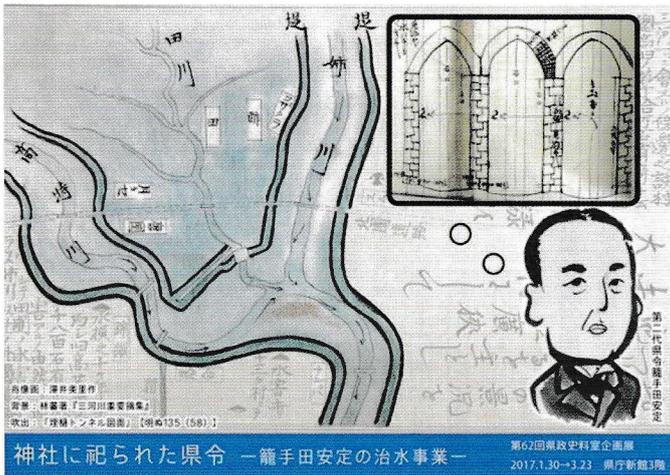
平戸藩士で心形刀流と一刀正伝無刀流免許皆伝の籠手田(こてだ)安定という人物がいました。生れは天保十一年(一八四〇)、五代友厚より五歳年下です。稀代のこの剣術家は政治家でもあり、大津県判事試験より皮切りに大津県(現滋賀県)大参事・滋賀県権令・滋賀県令・元老院議員・各県知事・貴族院議員を歴任しました。籠手田大津県判事試験就任の明治元年(一八六八)から滋賀県令退任の明治一七年(一八八四)まで、籠手田は滋賀県の官職を足掛け一七年間務めました。任期中の最大の業績は、今も語り継がれる治水事業でした。

滋賀県が平成二九年に「神社に祀られた県令——籠手田安定の治水事業」と銘打った展示を行い、籠手田県令(知事)が幾多の困難を乗り越えて達成した長浜市唐国町の治水事業を紹介しました。

往時、長浜市唐国町を北から南へ貫流する田川が、その西側を流れる高時川と東から流れてくる姉川との三川の合流地点で大雨の度に氾濫し、一帯を水害に見舞っていました。そこで地元各村々では、合流地点の上手で田川を分水し(田川の水を西へ流す分流をつくり)、高時川との合流地点では高時川の下をくぐらせるための伏越樋(ふせこし)

ひ)をつくる工事をして新川と名づけた新しい川へ水を流そうとします。ところが木製の伏越樋に耐久力がなく、その後も水害が起りました。明治一二年に県が内務省土木局の御雇工師デレーケに調査を依頼した結果、伏越樋を木造から煉瓦造りの暗渠に変更する「田川カルバート構想」が打ち出されました。明治一五年に地方税予算三万円余を計上して「東浅井郡水害除却工費」が県会に提案されましたが、わずかの差で否決されました。時の県令籠手田は県会に再議を求めますが、再び否決されました。翌明治一六年には籠手田「田川筋変更費」の名目でその治水策を県会に提案します。しかし、これも否決されました。

地方税の支出は県会が否決しても内務省が承認すれば執行可能でしたので、籠手田は前年に内務省にその旨を陳情していたのですが、それも聞き届けられませんでした。明治一六年五月、籠手田は再度内務省へ県の河田大書記官を派遣し、遂に内務省の許可を取りつけます。こうして、明治一六年一月に工事は着工し翌一七年六月に竣工しました。村人たちはのちに暗渠の近くに祠を建立し、籠手田県令を祀りました。それが今に残る水引神社です。



平成29年滋賀県展示資料より

籠手田の蓬谷鉦山訪問

五代が設立した鉦山会社弘成館の鉦山の中に、近江国愛知(えち)郡政所(まんどころ)村の蓬谷(よもぎたに)鉦山があります。明治七年のある日、そこへ大津県大参事の籠手田安定が訪ねてきます。片岡春卿編纂『贈正五位勲四等五代友厚君伝』から引用します。

明治七年、杉村次郎当山の鉦長たり。徳田藤次郎も此に従事せり。一日滋賀県参事籠手田安定来山して曰く。五代の義弟安定鉦業を一覧に来ると。徳田其言を訝り、之を問ひ。安定曰く、回顧すれば今は昔、文久・元治の交(ころ)、邦内各地開国鎖国の党派分立し、各々其の執る所の主義を達せんとす。而して五代君は開国派の鬍々(さうさう)、評判が高いたるもの、余は又純然たる鎖国主義なれば、宇内の形勢愈々切迫し来れるより意気激昂し、彼れ開国党等夷狄に心酔し皇国の大義を失するもの信じ、時機を窺ひ君に説き、聴かずんば一刀の下に斃さんと意を決して、君を長崎の旅館に訪ひしに、君直ちに余を延(ひ)ひて一室に会し、徐ろに吾邦当時の趨勢と海外の事情を述べ、到底今日攘夷派の主張する処は行ふ可きに非ず。更ればとて幕府が因循姑息の如きも、真に開国の方を得たるものに非ざるを、時勢に証し痛論せらるる事数時に渉り、君が説の良(や)や余が意を動かすに足るを覚ゆるを以て、其日は事なく引取り後数日を経て再び君を訪ひ、満腔を絞りに大に時事を討論せしに、君泰然として諄々鎖国は今日日本の国是に非ず、結局我に攻るの實力準備ありてぞ、国権を維持し体面を保有し得可きを、説き去り説き来り論破せられ、余良(まこと)に(く)く酔るが如く、而して后翻然鎖国の非を悟り、積年の迷雾初めて茲に消散し、爾来深く君が卓見を敬慕し、従来に反し交情濃やかにして

終に義結んで兄弟たらんことを乞ひ之を
諾せらる。是れ五代君を義兄と称する所
以なり云々。

講談調の語り口ではあるものの、このエピソードからは、劍客籠手田の一寸な思い込みと、返答次第では一刀のもとに切り捨てると意気込む相手に対して、動じることなく逆説得して、相手を味方に変えてしまう薩摩藩士五代の胆力とを伺うことができます。

「義兄弟」の籠手田は、「この訪問のあと、折にふれて五代の事業の見学に訪れ、五代と親交を結んでいきます。なお、『君伝』は籠手田の蓬谷銀山訪問を明治七年のこととしていますが、籠手田が五代に宛てた明治七年三月八日の書状が残っています(『五代友厚伝記資料』第一巻史料二二八)。そこに、「四日御認め華墨(書状)、五日相達し、拜読」とありますので、すでに三月の初めには両者に文通の始まっていたことが分かります。そうすると、籠手田の蓬谷銀山訪問は明治七年の一月か二月であったことになりませう。

この書状で三つのことを籠手田は書いています。ひとつは折しも台湾出兵直前の時期で、政府の中枢にあった大久保利通がその決断をしようとしているのを、「大久保卿、吾日本柱石の大臣、感心の至にて、於安定、倍(ますます)、相慕申候」としています。二つ目は、「名馬拝借奉願候心得に御座候」と五代所有の馬の拝借を申し出ています。五代の名馬所有はつとに知られているところでした。三番目は、「尊画(竹の水墨画のことでしょう)を日頃お描きになつて居るのであれば、「頂戴仕度」と五代の画を所望しています。こういう率直な書きぶりからして、いかに二人が親密な関係を結んでいたかが伺われます。

籠手田は、「この訪問のあと、折にふれて五代の事業の見学に訪れ、また五代の事業に協力しました。(次号に続く)」

五代友厚の

「直賢(じきぼう)」を

具現化した

兼松房治郎(下)

Dream 五代塾顧問 曾野豪夫

「艱難(かんなん)汝(なんじ)を玉にす」

敗戦翌年難中に入学した時、漢文の先生に教わった。以来80年近く、中国の諺だと思っていたが、今回ネット検索してみたら英国の "Adversity makes a man wise." (「逆境は人を賢明にする」)の意訳のことだった。兼松房治郎は阿片戦争終結三年後の弘化二年(一八四五、日本の敗戦一〇〇年前)、大坂

江之子島(川口の近く)で尾張国布袋野(ほての)村出身広間弥兵衛の長男として生まれた。五代友厚の十歳年下だった。



兼松房治郎 満60歳
明治38年最後の
渡豪時にシドニーで
(日露戦争戦勝直後)

父の弥兵衛は青年になって素行が収まらず、祖父に勘当されて大坂に出て豊表商吉田某の店で働いた。その後品行を慎み忠勤を励んだので、通勤手代にまでなり、別家として独立し主人の媒酌で伏見帯屋町斎藤吉右衛門の末娘八重と結婚した。兼松の両親である。

兼松が生れて三ヶ月、父は豊表買い占めの嫌疑で官憲の探索を受け、妻に何も告げずに出奔してしまつた。仕方なく母は尾張の夫の実家に寄宿した。しかし一年経つても夫からの連絡はなく、母子は伏見の実家に戻る事になった。そして母は心ならずも兼松三歳の時に同地の魚商北村某と再婚した。同家はそ

こそこの生計を営んでいたが主人が急逝したため営業を続ける者なく、九歳の兼松は母と共にまた実家に戻る事になった。

その前年嘉永六年(一八五三)、ペリー提督が浦賀に、一ヶ月半後プチャーチン提督が長崎に来航した。五代が二十三歳で長崎海軍伝習所に派遣される四年前である。

十一歳になった少年兼松は、立身出世して家道を興し、父母の鴻恩に報いるためには水もあえて辞せず、遠く他国にゆき遍(あまね)く辛酸をなめるにしがず、と決心した。

語るも涙、聞くも涙の丁稚奉公

安政三年慈母と祖父母の計らいで兼松は伏見西浜の醤油味噌などを商う葺(よし)屋に丁稚奉公にでた。朝早く起きて午前中は得意廻りをし、午後は先輩の店員について貧民部落を回つて味噌、醤油、酒の小売りする日課だった。しかし、その前途がないことを悟つた。

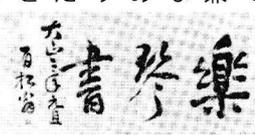
そこで翌年、京の東洞院万寿寺の耐屋庄兵衛(通称耐翁)の住込み店員となった。ところがこの主は性格が苛酷で、朝は寅の刻(三、五時)にたたき起こされ、いかに酷寒の朝でも気分が悪い時でも練(にしん)二、〇〇〇本と棒鱈(ぼうたら)一、五〇〇本を洗うことを命じられた。その内に番頭、丁稚頭などが起きてきて店頭の拭き掃除、朝食。当時の京の町屋の朝食は、芋粥をすする程度。食事は主人、番頭、丁稚と序列の順番に鍋から粥をすくうので、末席の「房公」は芋の筋と汁のみだった。朝食が終われば湯菜、椎茸、干瓢、昆布、高野豆腐の注文取り。昼は温飯(ぬくめし)がでるので兼松の唯一の楽しみだった。午後注文と配達にでかける。夕食は朝食と同じ。それから昆布の塩掃き、練(にしん)の撰分(よりわけ)、鯉節の艶つけ、穴埋めなどの作業が待っていた。それが終わると、番頭に算盤を習う。ついうとうととして番頭から算盤で頭を叩か

れたこと幾たびか。煎餅より薄い煎餅布団に身をゆだねてうとうととして寝しよんべんをすることまた幾たびか。その都度布団を体温で乾かして朝一番に起きて湿つた布団を押入れの一番下に置く。入浴は五日に一度。

一年数ヶ月がりに伏見に里帰りした兼松を見た母は、余りにもやつれて息子の容姿に驚き、両親と相談して京の高倉松原通りの蟬燭屋に丁稚奉公させることにした。仕事は楽だったが将来の見込みがないので「こも一年余りでやめた。」

岡部駿河守の用人大野新右衛門

大坂に住む遠縁を頼つて江戸堀の米屋孫太郎方に兼松は丁稚奉公することになった。ある日、得意先で米の代金を領収し、その受取りを書いていると店頭でいた数名の丁稚が下手な文字をみて失笑した。かねてから己の無学文盲を嘆じていた兼松は、ますます学問の必要性を痛感した(明治に入ってから



楽琴書 兼松房治郎大正12年、
七くなる直前に陶淵明の詩から

は能筆家として知られるようになる)。とかくする内、祖父母と慈母が相次いで亡くなり、父は行方知れずのままであり天涯孤独の身となった。

兼松にある日主人が言った。「近く長崎奉行岡部駿河守の用人大野新右衛門様が北浜の銅座に一週間宿泊されるのでその身の回りの給仕をするように」。機敏に立ち働く兼松の身上話しを聞いた大野は、別れ際に言った。「いつでも江戸に来ることがあれば世話をしやろう、ではさらば。」

江戸で「かんぴん」となる

大野の言葉を信じて兼松は江戸に下る決意

をした。文久二年(一八六二)、貯金と遠縁からの借金で、まず八軒家船着き場(天満橋)から三十石船に乗って伏見の寺田屋に一泊(あの寺田屋?)。母方の親戚宅を素通りして宇治を経て奈良に入り、柳行李、雨合羽などを整理して東海道を下った。時に十七歳の夏だった。

江戸で岡部駿河守の屋敷の裏門を叩いた。驚いたのは用人大野である。自分のリップ・サービスという言葉信じて江戸に來た兼松に「江戸はそんなに甘いところではない」と帰郷を促したが、結局仕方なく門番小屋で働くことを許した。やがて利発な兼松は駿河守の目にとまり、奥付中小姓に取り立てられ、若殿のお供をして学問所で共に学問や習字を学び、武芸所で鍛錬する機会を得て文武の知識と世の中の動きを少し知るようになった。武家社会では異例の大出世(?)である。

翌年、駿河守が大目付となると、兼松はさらに御用部屋書役に抜擢され、一方講武所で銃術の訓練を受けることになった(幕末、幕府の洋式武芸訓練所)。そして駿河守の部下の斡旋で四両二人扶持の足輕の株を買って両刀を腰にする身分となった。通称「さんびん」である。江戸時代一番身分の低い侍の一年分の給与が三両一人扶持(現金三両と一日当たり米五合)だったことによる

俗語(卑称)である。幕末には、四両一人又は二人扶持となっており、住み込みの女中位の年俸だった。更に上司の周旋により歩兵となって一人半扶持の加増を得て、フランス軍の軍事教練団から「un, deux, trois...」と鉄砲や大砲の稽古をうけた。



岡部駿河守長常

ある時、兼松は敵父広間弥兵衛の出身地近くの岩崎村に聞き知っていた親戚兼松家を訪ね、父が名古屋に健在なることを知り、よっや

く十余年振りに父子対面をすることができた。房治郎は親戚の懇望により兼松家を継いだ。以後実父が明治七年に亡くなる迄扶助を行って孝養を尽くした。

筑波の役(天狗党討伐)に出陣す

元治元年(一八六四)三月、水戸藩士が筑波山で尊攘の兵を挙げた。幕府講武所頭取兼歩兵奉行から兼松は歩兵指図役下役並見習に挙げられ、次いで第三聯隊第一大隊三番中隊小隊司令官を命ぜられて野州(下野国、現栃木県と群馬県あたり)に出陣し、各所に転戦した。役後、兼松は仏兵駐屯司令長官から仏法陣兵の式を伝習した。何事にも熱心な兼松は技術の習得が早く、下役並に昇級した。とは言え、足輕のちよつと上である。

兼松は考えた。仮に大隊長、連隊長に昇進したとしても大したことはない。外国兵の指揮の下で日本人同志が戦争をするのも馬鹿らしい! そうだ、商業によつて身をたてよう!

商業、貿易こそ我が道

慶応元年(一八六五)三月、兼松の姿は横浜にあった。五代友厚一行十九名が鹿児島串木を出港して欧州に出立したちよつとその頃である。暫く横浜の様子を視察して兼松は大坂に戻った。間もなく幕府の長州征伐が起こった。翌二年春、一友人と資金を出し合つて伏見の清酒を一船に積んで山口に密航して高値で販売することができた。しかし長州側から兼松は幕府の密偵かもしれないと疑われ厚遇はされたが六ヶ月間逗留させられ、ようやく相対の利益を懐にして帰坂した。

世情は大きく揺れ動いていた。兼松は叔母が摂津茨木十一村のお寺に嫁いでいたのでそこに寄宿し、近所の児童に習字などを教えながら明治維新を迎えた。兼松は全資金を持つ

て新開地横浜に出た。伊豆屋富太郎と共同で金巾(カネキン、葡語綿製吧)、綿糸、雑貨などを売買して利益を得た。次いで神戸にゆき石炭のブローカーをして相当の利益を上げた。一年後倒産して元の木阿弥となつてしまった。そこで新開地新潟に赴いたが無一文に等しかったので何も商売はできなかった。ある日、神戸で親しくなつた蘭商アデリヤン社のカネテラと遭遇し、彼と共同で商品売買を行い、また砂糖の輸入で相当の利益を得た。更に加賀藩の商事方をしていた谷道英橋と懇意となり、綿、砂糖、鉄などを同藩系列商に売り込み多額の利益を重ねた。一年半後、東京を経由して急発展している横浜に舞い戻った。

新潟で親しくなつた越中高岡の谷口と池津の兩人と出会い、当時流行していた蚕卵紙(たねがみ)を外国商館に売り込んだ。日に月に事業は盛大となり、前途洋々たるものがあつた。この時の得意満面の二十五歳、背広姿の兼松の写真は本紙第十六号に掲載してある。然るに明治三年七月、普仏戦争が起こり、相場が暴落しました一文無しとなつてしまつた。

B.H.バラー師夫妻から英語を学ぶ

兼松は考えた。「畢竟(つまり)まるころ)は時なり。焦つてはならぬ。英語を習つて時を待とう」と。そこで横浜在住のアメリカ人宣教師バラー師夫妻について英語を習つた(日本に最初にできたプロテスタント教会の牧師)。夫とも好人物で、夫人は兼松の口の中に指を突っ込んで舌を引っ張つて発音を教えた」と記憶しているが、今その資料が見つからない。バラー師は、「ハボン師より十七歳若かつたがお互いに協力関係に



横浜のバラー師夫妻

あつた(明治学院の創学者はハボン師である)。バラー夫人は自著の "Glimpses of Old Japan 1851-1866" に、「貧困と女性への虐待ともとれる風習が蔓延していた清国と比べ、日本での女性の自由と、女性天皇を生み出した日本の歴史的な女性の地位の高さ」を書いて感嘆している。

兼松はハボン夫妻とも面識があつたと思う。英語を習つたかも知れない。これらの人について、兼松はスペリング、グラマー、バイブルなどを習つて得るところがあつた(社史や兼松の言動からクリスチャンに改宗はしていなかったと思つ)。翌四年、弁天通に外国語学校が設立されたので兼松は同校に入学した。そこで元農商務省鉱山局長の伊藤次郎から訳文などを教わつた。この間、食事はたいていパンと水。たまに友人から借金ができた時は牛肉店に飛び込んで栄養補給をした。

明治五年二月二十七歳、兼松は横浜を辞して大阪に戻ることにした。途中、ふと伊勢の取引先に未回収金があることを思い出して立ち寄つた。幸いにも百五〜六十両(円)を回収でき、大阪江戸堀屋旅館に投宿した。適当な仕事が見つからずアメリカへの渡航も考えたがうまくゆかなかつた。

世界一の羊毛輸入商へ(シェア66%)

明治六年二十九歳のある日、神戸に所要があつて汽船に乗つたところ、偶然にも外国語学校の伊藤先生と邂逅し、三井組総理三野村利左衛門を紹介されて同銀行部に就職することになったことは、本紙第十六号、本稿(上)の通りである。三井組銀行部以降の兼松の生涯は

本紙第十六、十七号にもどつてご通読頂きたい。



晩年の伊藤次郎先生兼松は終生厚誼を尽くし、後継者にもそれを読んだ

第十六号訂正

- ・ 一頁三段目:「大阪に戻る船中」↓「大阪から神戸への船中」
- ・ 二頁三段と四段目:「創業社長」↓「創業社主」(大阪毎日新聞社の登記は翌年。)

艱難辛苦の末兼松は、三井組銀行部を経て異例にも三井元之助の代理として明治九年大阪堂島米商会所肝煎(現在の専務理事か)となつて五代友厚の信頼を得た。更に十一年大阪商法会議所設立に伴い初代肝煎に就任した。私の外祖父永見米吉郎は長崎で薩摩藩の御用商人を勤める永見商店の末弟であり、長崎在勤の五代の推挙もあつて慶応二年大坂に雄飛した。そして十一年大阪株式取引所の初代肝煎となり、その長男省一が五代の娘の従妹綾と結婚した。

因みに兼松商店は、第一次欧州大戦直前の一九一三〜一四年季(大正二〜三年)の豪州羊毛取扱高は日本商社七社中、実に六六・五%だった!ここにおいて五代と兼松の夢は、豪州羊毛輸入については確実に実現したのである。豪州以外のニュージーランド、南アフリカ、南米からの輸入を含めると世界一の羊毛商であろう、と世界中からいわれた。大正十一年、私の父は「羊毛の兼松商店」に入り、戦後私と娘の直系三代が兼松に勤めることになった。その兼松を五十五歳で退職して四十五年が経ち、繊維産業は中国他の国々で隆盛している。

主な参考資料

- ・ 西川文太郎『兼松濠洲翁』神戸新聞社大正三年。著者は兼松翁明治三十八年第八回目最後の訪濠に二ヶ月間同行して帰朝後本書を出版した。しかし翁は一年半前の大正二年に他界していた。享年六十八。
- ・ 天野雅敏『戦前日豪貿易史の変遷』兼松商店と三井物産を中心として』勁草書房二〇一〇年
- ・ 『毎日新聞一〇〇年史』一九七八年

Dream 五代塾活動状況

◆第13回 Dream 五代塾セミナー実施

2月17日(土) 定例のセミナー(五代友厚勉強会)を開催した。『五代友厚小伝』18話著者八木孝昌の第3話「長崎遊学と薩英戦争」を教材にし、補足資料をパワーポイントを使い勉強を進めた。



五代の長崎遊学の第1回は薩摩藩の選抜で長崎海軍伝習所で西洋の学問や船舶技術などを習得するため、今回は藩命で長崎に着任し、貿易や蒸気船の購入、欧米諸国の情勢を調査するのが使命である。この長崎遊学から薩英戦争でイギリスの捕虜となり横浜に上陸するまで4年余りの短い期間であったが、後の官職や下野後の経済活動の支えとなる人脈を築き、また、欧米諸国の脅威や先鋭的な考えを体験し、貴重な時間であったはずである。

例えば、五代はグラバールと昵懇の関係を結び、共に上海に渡り汽船を購入したり、幕府船千歳丸に水夫の名目で乗船、上海で2ヶ月間市場調査もしている。広く見聞し多くの知識を吸収した時期でもあった。今回は第4話「潜伏生活と藩への上申書」を勉強する。



◆ステンドグラスの額

当会員で三浦春馬さんファンの方から「天外者」の写真入り額を頂きました。額は縦29cm×横28cmと大きなサイズです。早速部屋に飾りました。有り難うございました。



◆第14回 Dream 五代塾セミナー予定

日時: 4月20日(土) 14時〜16時
場所: 川口宅 勉強内容・進行(川口建) 教材: 「開学の祖 五代友厚小伝」18話 (著者八木孝昌・非売品)
第4話「潜伏生活と藩への上申書」(500円)

その他セミナー・イベントのご紹介

●中之島図書館街歩き講座参加
1月27日、森島克一氏講演「事業家・五代友厚の金銀分析所」その知られざる出発点

●五代友厚生誕ウィーク イベント参加

2月8日、スタンプリーに参加。缶バッジと小物入れを頂きました。また、大阪商工会議所のリニューアル後の「五代友厚像」と対面。



2月13日、町田明広氏講演、「グローバル幕末史と五代友厚」パリ万博を中心に〜」

●堺事件(平和を築くための国際理解講座)

於・堺市妙国寺参加
2月23日(主催:堺事件を語り継ぐ会)に会員としてお手伝い参加した。23日は土佐藩士11名が妙国寺で切腹した日です。今年は7回目の開催で、当時の隊員橋詰愛平(12人目の切腹予定者)の御子孫や堺市長をはじめ100名あまりの参加者をお迎えして、法要・紙芝居・講演会などが行われた。



隊員橋詰愛平(12人目の切腹予定者)の御子孫や堺市長をはじめ100名あまりの参加者をお迎えして、法要・紙芝居・講演会などが行われた。



編集後記

半田銀山を見上げる福島県伊達郡桑折町にある桃源郷🍑四月中旬ごろから🍑桃の花が満開を迎える。3年前の10月にこの半田銀山の坑道、資料館、五代さんの碑などを訪ね、その帰りに阿武隈川沿いに約120ヘクタール(約363000坪)の桃畑を観た。桃の実も何もない枝だけがある広大な桃畑が広がっていた。明治時代から昭和には桑畑が広がっていたので五代さんが半田銀山を訪ねた時には桃ではなく桑畑が広がり養蚕業が盛んであったのでしよう。五代さんはその時代にすでに銀山の労働問題、地域の公害問題について真摯に向き合い未来を見据え事業を行っていたことに感動する。桑折町も未来を見据え桑畑から桃畑へと転換し今は献上桃として全国に名を馳せている。是非機会があれば桃源郷を見に出かけてみてください。

また4月5日(金)三浦春馬さんの誕生日に映画【天外者】が全国で再上映されますので皆様時間があれば大画面での五代友厚公、三浦春馬さんを堪能下さい。そして終盤の大阪商法会議所での友厚公の日本を想う熱いセリフを聞き逃さないでください。(川口由美子記)



(連絡先:川口建) Email:gogoken12345@gmail.com
Tel:080-4497-5688 HP:https://www.dream-godai.com